

經濟論叢

第 138 卷 第 3・4 号

「経済とは何か」：ボラーニ対ハイエク……………高 橋 正 立	1
マルクスにおける貨幣と時間(下)……………八 木 紀一郎	21
工場内の作業における構想と実行の分離……………北 川 與司雄	39
タイ工業化の歴史的前提……………上 田 曜 子	54
世界恐慌期の通商政策とダニューブ諸国問題…伯 井 泰 彦	75
イギリス公営住宅政策の形成と住宅経済 の発展……………藤 原 一 哉	98

昭和 61 年 9・10 月

京都大學經濟學會

「経済とは何か」：ポラーニ対ハイエク

——「市場」を軸とした認識関心の対立——

高 橋 正 立

I はじめに——存在としての〈経済〉——

「経済」という語は、今日では、誰でもが日常的に口にする言葉である。それというのも、〈経済〉という事実が日常的に、課題として、われわれの前に現われて来、われわれ現代人は否応なしに自らの行為においてそれとの関わりを持たないわけにはいかないからである¹⁾。それだけに、たとえ個別的な、あるいは断片的な姿においてであるにしても、人びとは誰でも、〈経済〉についてのそれぞれのイメージを自らのうちに作りあげているはずである。

このばあい、このイメージが、何か存在するものについてのイメージであるかぎり、〈経済〉は人びとにとっては、まず存在するものとしてある。次いで、それは人びとの認識対象となる。ただし、そのばあいの認識作用は、さしあたっては第一次的なもの、感性的なものに留まっても構わない。

ところが、〈経済〉というのは、そのようにきわめて一般的な語でありながら、いや、むしろ「それだからこそ」、と言うべきかもしれないが、さてこれを一般的な定義の形でとらえようとすると、その途端に、くねくねと逃げ廻るうなぎのように、どうしてもしっかりとつかむことができなくなるという代物でもある。つまり、われわれが、いざ認識対象としてあらためて〈経済〉を見直そうとするとき、われわれは、それがかなり複雑な様相を呈していることに、気づかないわけにはいかないのだ。

1) このように言っても、それは「現代人」だけが経済の営みを行っているという意味ではない。
念のため。

〈経済〉をつかむのが難しい理由を端的に言えば、それは、〈経済〉が、たとえば1つの石ころのように目に見える具体的な個物としての存在ではなく、何がしか抽象的な存在だからである。抽象的なものは抽象的なものそのままの姿で感性的にとらえられることはできない。認識する側での抽象化作用を媒介としてはじめにとらえられうるのである。ところが、現代の日常の生活人としてのわれわれは、一般に、〈経済〉の姿を、個々の現象に即してであれ、感性的にとらえたつもりになっているはずである。それは、現代においては、本来抽象的な〈経済〉が、常にそれと固有なかかわりをもつ具体的な存在物、たとえば個々の貨幣、個々の商品、それにつけられた価格などと結びついて現われるからである。われわれは給料とか、商品の生産とか、売買とかの日常的な経験において、いちいち抽象化の思考手続きを経ないで、あたかも、そこに直接に〈経済〉が存在しているかの如くに思っている。このことが可能なのは、貨幣、給料、商品、商品生産、売買、価格とかが、実は、われわれにとって〈経済〉のきわめて日常的なシンボルになっているからである。

だから、「その実体は？」とあらためて問われると、逆にシンボルのもつ具体的なイメージにさえぎられて、抽象的な〈経済〉を定義の形で表現することに困難を覚えるのである。そのため、たとえば石ころのばあいには、「石ころ」という名辞とその存在対応物との一義的な関係が万人によって共有されることは、比較的容易であるのに、〈経済〉のばあいには、「これが〈経済〉だ」とお互いに了解し合っているつもりでも、それぞれに行なっている抽象化の方向や程度はお互いに異なっており、その結果、お互いが頭の中に思い浮べている〈経済〉の表象は異なったものとなりがちである。しかも、それが相違していること、お互いの了解に実はズレのあることが、その場ではすぐには分かりにくいというのがこの事柄の本来の性質でもある。

前稿では、マーシャル (Alfred Marshall, 1842-1924) にロビンズ (Lionel Robbins, 1898-1984) という、いずれも現代の経済学に大きな影響を与えているながら、方法の上では対極的な立場に立つ2人の経済学者の、〈経済〉とは何

かについての見解を検討した²⁾。その結果、〈経済〉を研究することを職業としている人びとの間にあってさえ、〈経済〉の理解にいかに大きな食い違いがあるかが示された。「経済学とは、経済学者が研究しているものだ」というヴァイナー (Jacob Viner, 1892-1970) の警句は、まさに単なる警句以上の真実性を持っている、と言うべきである。

ところが、それでは彼らが〈経済〉と呼んで具体的にイメージしているもの同士のあいだにもそれほど大きな食い違いがあるか、というと、どうもそうとばかりも言えないようである。認識の側での論理の一貫性を重視したロビンズですら、マーシャル流の定義を用いればいかなる事象を〈経済〉から閉め出してしまうことになるかを具体的に呈示し、それが一般の（おそらくマーシャルをもふくめた）イメージと大きく背馳する結果になることを指摘するという仕方でもマーシャル流の定義の不適切さを証明していたことを思いだしてもらえばよい³⁾。具体的なイメージとして突きつければ、誰でも承認せざるをえないはずだ、という確信がその背後にある。つまり、この経験主義的な検証方法は、〈経済〉の定義に先立って、〈経済〉という語とそれに照応する普遍的かつ共通のイメージが存在していることを前提してはじめて成り立つものなのである。

ロビンズの経済学の定義は演繹的な経済学の方法に出発点を与えるものではあったが、その定義自体の導出はやはり広い経験からの帰納である他はなかったはずで、したがってまたその妥当性の証明ないしは、それと食い違う見解の当否の検証もまた経験主義的な方法によらざるを得なかったのである。

そのように考えて来ると、〈経済〉とは何かの問いにたいする答えは、人びとが何を〈経済〉と考えているのかを明らかにすることによって、近似的に与えられることができると考えることもできよう。そうすることは結局、人びとの〈経済〉についての表象の実在的な対応物を経験の次元で確定することであり、さらに言い換えれば、「存在としての経済（と人びとが考えているもの）」

2) 高橋正立「経済とは何か——マーシャル対ロビンズ：手段・目的内容からの規定と行為様式からの規定」『彦根論叢』234・235（松尾博教授退官記念論文集），1985-11。

3) 前掲拙稿3ページの脚注4を参照。

の姿を経験的に明らかにすることである。

II 学史的接近——現在の認識の過去への投影

経験主義的な方法が〈経済〉の定義の妥当性の検証において有効性を持つならば、その経験をできるだけ拡張することによってより普遍的な〈経済〉の定義に近づくことが出来るはずだと考えることはできないだろうか。つまり、同時代的な経験にとどまらず、歴史的に過去の経験をもこれにつけ加えようというのである。

そこで、早速、たとえば、シュンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883-1950) の大著『経済分析の歴史』⁴⁾を開いてみよう。彼はまず経済思想と経済分析を区別する。彼によれば、このうち経済思想はむしろ経済史の領域に属するものであって、「その最初の記録は古代の民族的神権政治国家についてのものである」。続いて彼は、その記録に残されているものとして、古代エジプトの「一種の計画経済」、アッシリアやバビロニアの「完壁ともいうべき貨幣制度」および「信用と銀行業務」、そして、それらと並んで、古代中国の「あまねく農業・商業および財政の問題を取り扱っている非常にすすんだ公共財政」、などを列挙して見せる (p. 38-9, 訳72-4 および p. 52-3, 訳98-9)。

しかし、彼によれば、この大著の主題をなす経済分析について見れば、その歴史は、経済思想よりもかなり遅れて、ようやくギリシャ人から始まることになる (p. 52, 訳98)。すなわち、プラトンは、分業が能率を増進させる理由についての独自の認識を示した人であり、彼によって貨幣「象徴」説が打ち出されたこと (p. 56, 訳108)、またアリストテレスによって、「欲望とその充足の基礎の上に」「自足せる家計の経済から出発して」「分業、物々交換」および価値が考察され、貨幣も導入されたことが語られている (p. 60, 訳117-8)。さ

4) Joseph A. Schumpeter, *History of economic analysis*, 1954 (6th printing, 1967), 東畑精一訳『経済分析の歴史』岩波書店, 1955。〔以下、引用文については、引用ページを原則として本文中に示す。なお、本稿での引用文はすべて、邦訳のあるばあいでも、必ずしもそれに依ってはいない。念のため。〕

らに、キリスト教の支配する中世になって、トマス・アクィナスが、財産や徴利を、神学の立場から、つまり「神との調和」の観点から分析したことの叙述がある (p. 92-4, 訳188-192)。

このように見てくると、なるほど、数千年も前のエジプトにおいて今のわれわれが言っている意味での〈経済〉の事実の存在が確かめられ、ギリシャの時代にはそれを分析する試みもすでに始まっていたことが分かる。だが、それらの事が分かったからといって、〈経済〉についてのわれわれの経験が少しでも広がることになったのだろうか。どうも、そうはならなかったようである。古代のエジプト、ギリシャで見られた事実は、交換とか貨幣とか利子とか分業とかのどれをとっても、今のわれわれの言う典型的な〈経済〉にふくまれるものばかりである。こうした過去の事例を加えることによって、たしかに、われわれの経験は「豊かになった」と言うことは出来よう。しかし、おそらく、「広がった」と言うわけにはいかないだろう。なぜなら、これらの事例と同種のものは、いずれも現代のわれわれの経験の中に見出されるものばかりであって、そこに新しい種類の経験がつけ加わったわけでは、決してないからである。

だが、よく考えてみると、それもそのはずである。というのは、われわれがこうした仕方では歴史を遡るとき、われわれは〈経済〉という名辞によって何を表象するかについての先人の経験を追加しているのではなく、じつは、われわれが〈経済〉という名辞を与えている今の事象を過去の文献ないし事実の中に探しているに過ぎないからである。したがって、名辞とその対象を関係づける認識の経験としては、それは依然としてわれわれ自身の経験を一步も出ていないことになる。言い換えれば、それは現在の認識を単に過去に投影しただけのものにすぎないのだ⁵⁾。

それゆえ、もともとシュンペーター自身にしても、自分の叙述は、古人の、主として政治学、倫理学、神学上のテーマを扱った著作に見られる「経済思想

5) 厳密に言うならば、現在の認識を単純に過去に投影する場合と、現在の認識とそれに対応する実在をその対応を保ちながら順次過去に遡らせていってその源流に到ろうとする場合とを、区別する必要があるが、今の行論の中ではそれほどまでする必要はなからう。

のなかで「科学的といえる断片を」「拾い集め」て再構成したものだ、としているのである (p. 54, 訳102)。

そうして見れば、もしわれわれが〈経済〉について一般とは異なる見解を持てば、それに応じて歴史の中にまた別の〈経済〉の事実を見ることが出来ることになるはずである。その1つの例が、経済史家ポラーニの**ばあい**である。彼は、交換を経済の本質だと見たシュンペーター⁶⁾とは対照的に、市場経済を〈経済〉の特殊な形態だと見なした。節を改めて、その所説を検討してみよう。

III 「生活の営み」——ポラーニ

ポラーニ (Karl Polanyi, 1886-1954)⁷⁾は、「人間経済一般をその市場形態と同等視する」のは誤りだとし (L. p. 6, 訳36)⁸⁾、その立場から、「交換」のほかにも、「互酬 reciprocity」とか「再分配 redistribution」という〈経済〉の事実を、過去の歴史および現代の人類学的知見の中から引き出してくるのである (L. p. 35 ff, 訳89以下)。

それでは、ポラーニにとって、〈経済〉とはいったい何であろうか。

彼は、「〈経済的 economic〉という用語の使用は、(その持つ根本的な)あいまいさのために混乱に陥っている。」(L. p. xlvii, 訳14; p. 6, 訳36)という認識から出発する。彼によると、「〈経済的〉という用語は、通常、ある型の人間活動を表現するのに用いられているが」、それは、実は「異なった起源をもつ2つの別個の意味の複合物である」(L. p. 19, 訳58)。

その第1の意味は「形式的なもの」で、「節約 economizing とか経済性のある economical」といった言い方に見られるように、目的-手段関係の論理的

6) Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, 1908, S. 49 f, 大野忠男他訳『理論経済学の本質と主要内容』岩波文庫, 1983, 111-2ページ。

7) Polányi の日本語表記を、ハンガリー語にしたがって「ポラーニ」とした。彼にはドイツ語の論文もあり、そこでは Polányi と、'á' が書かれている。玉野井氏が「ポランニー」とされている理由のひとつは、彼の仕事を英語圏だけのものとされていることがあるようだ。注8にあげた書物の邦訳のまえがき(『日本版の編集にあたって』)を参照のこと。

8) Karl Polanyi, *The livelihood of man*, 1977, 玉野井他訳『人間の経済 I ——市場社会の虚構性』岩波書店, 1980, [以下、本文中では L. と略記]。

性質から生じる」ものであり、「〔経済的〕の希少性定義につながっていく」。これに反し、第2の意味は「実体的な substantive もの」である。「それは、人間は他のあらゆる生きものと同じように、自分を維持する物的環境なしには瞬時たりとも生存できないという基本的事実を指し示している。それが経済的 economic の実体的定義の起源である。」(L. p. 19, 訳58-9)「希少性」と「生存 subsistence」,「形式的なものと実体的なもの、これら2つの意味のあいだに、共通のものはまったくない。」「前者の意味が論理から派生するのにたいし、事実から派生する意味が後者である。」(T. p. 243-4, 訳259-260)⁹⁾¹⁰⁾。

ポラーニは、2つの意味が両立するばあいのあることを承認しながらも(T. p. 244, 訳261)、自分の用いる「経済的 economic」の意味としてはこの後者を採用することを言明する。そして言う、「人間の生活の営みは、自然と自分の仲間たちに依存している」、「人間は、自分自身と自然環境とのあいだの制度化された相互作用のおかげで生きている。」「この過程が経済 the economy なのである。それは人間に物質的欲求を充足する手段を提供する。」もっとも、「充足すべき欲求は、肉体的必要だけだと受け取ってはならない。そのような制約をおくと経済 the economy の領域を馬鹿馬鹿しいほど狭く限ってしまうことに

9) Polanyi, The economy as instituted process, in K. Polanyi, Conrad M. Arensberg, and Harry W. Pearson (eds.), *Trade and market in the early empires: Economies in history and theory*, 1957, The Free Press/Collier-Macmillan, 玉野井他訳『経済の文明史』日本経済新聞社, 1975, [以下、本文中では T. と略記] なお, *The livelihood of man*, p. 19-20, 訳58-59にも、ほぼ同じ叙述がある。

10) このように主張するにあたって、ポラーニは、メンガーもまた「経済」というタームのうちに2つの意味があることを認めたとして、メンガーの『経済学原理(第2版)』を援用しているが、メンガーの叙述そのものに即して検討してみると、ポラーニはメンガーを無理に自分の図式の中にはめ込もうとしているように見える。しかし、本稿では、ポラーニ自身の所説が問題なのであるから、この点についての詳述は別の機会にゆずり、ここでは、ただ、ポラーニのメンガー理解に問題のあることを指摘するだけにとどめておく。興味のある読者は、みずからメンガーについて見られよ。Polanyi, Carl Menger's two meanings of economic, in George Dalton (ed.), *Studies in economic anthropology*, 1971, 玉野井芳郎訳「メンガーにおける『経済的』の2つの意味」(所収: 同『エコノミーとエコロジー——広義の経済学への道』みず書房, 1978, 316ページ以下) [以下、本文中では M. と略記], および *The livelihood of man*, p. 21 f. 訳63ページ。Carl Menger, *Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 2. Aufl., 1923, SS. 60-64 u. 72-79, 八木紀一郎他訳『一般理論経済学1』みず書房, 1982 [邦訳には原書のページが記されている]。

なるからである。欲求ではなく、手段が物質的なのである。」(L. p. 20, 訳59-60), と。

ポラーニの〈経済〉をもう一度「簡潔に…定義すれば、それは、人とその環境とのあいだの制度化された相互作用の過程——そこから、欲求を充足させる物質的手段の継続的供給がもたらされる——であると言えよう」(T. p. 248, 訳265)。前稿で見たマーシャルとロビンズの対立は、ポラーニによって実質上このようにつかみなおされた上で、実体論をとるという意味ではマーシャルの側に立つ彼自身の立場が、明らかにされているわけである。

しかし、同時に明らかになっていることは、ポラーニの問題への関心の出発点がマーシャルのそれとはかなり異なっていることである。そのことがこの問題の取り扱いに新しい次元を付け加えることになっていることを見逃すわけにはいかない。マーシャルの経済学の定義は、構えとしては市場経済にその対象を限定させるものではなかったが、事実としてマーシャルが考察の対象としたのは近代の資本主義社会であった。しかし社会の発展段階論がなければ、その理論は暗黙裡に市場経済を普遍化することにつながるものであることも確かである。ロビンズの定義にしても、その抽象性・形式性のゆえに、これまたいつの時代、どのような社会の人間にも適用可能なものであった。もちろん、両者とも、とりたててそのように主張しているわけではないし、またそのように考えたわけでもなかっただろう。しかし、論理的にはそうした普遍妥当性を要求するものになっていることは否定できない。

人類学者ポラーニが新しく問題にしたのは、まさしくこの点である。ポラーニによれば、ロビンズ流の、したがって第1の意味での〈経済〉は、つまるところ、〈経済〉の「希少性定義」を意味している。それゆえ、そこには a) 「物的なもののすべてが不足している」¹¹⁾ことと、b) 「個体の欲求と必要の無限

11) この点で、ポラーニは厳密さを欠いている。「物的な物すべてが不足している」と主張した経済学者がどこにいただろう。希少性にとくに重要な理論的位置を与えたカッセルでさえも、そのようには言っていない。そもそも、タームとしてはともかくとしても、古くから「自由財」についての認識があった。

性」との2つの前提が、人間に普遍的な事態として置かれていることになる。しかし、彼はこの2つの仮定のいずれをも、普遍的なものとしては拒否する(L. p. 27-31, 訳74-80)。

「そうした見地においては、誤りは、人間経済一般をその市場形態と同等視することにあった」というのが、ポラーニの認識なのである。「供給-需要-価格機構（一般にわれわれは市場と呼んでいる）は、特定の構造をもった比較的近代的な制度である。」「経済的という類概念（the genus economic）の領域を特に市場現象に限定するのは、人間の歴史における最大部分を史実から排除することになる。その一方、あらゆる経済的現象を包摂するにいたるまで市場概念を拡張するのは、経済的なものすべてにたいし、市場の現象にともなう特殊の性格を人為的に与えることになる。かくて否応なく、思考の明晰さは損なわれる。」(L. p. 6, 訳36-7)。

ポラーニは、こうした立場から、人類史のなかにさまざまな形態の〈経済〉を探って行くことになる。そのばあい、「経済とは、制度化された過程である」（傍点は引用者）というのが彼のいまひとつの基本的な認識であった。「過程」とは、a) 場所の移動（輸送・生産）、b) 占有の変化を指す。しかし、それだけであれば、経済過程は「諸要素のあいだの機械的・生物的・心理的な相互作用に還元され、その全体的な現実性を失ってしまうことになる。それに含まれるのは、生産過程と輸送過程、および占有の変化過程という骨格だけになる。そこで、経済の制度的側面が、ことのほか重要になる。」「経済過程の制度化はその過程に統一性と安定性を与えるものである」(T. p. 249, 訳267-8)。かくて、「交換」・「互酬」・「再分配」が、ポラーニによって人類史のなかに見出された3つの制度である。

IV 「市場（交換）」——ハイエク

サイエンスとしての経済学の純化を目指し、〈経済〉を徹底してその形式性においてつかもうとしたのがロビンズであったが¹²⁾、その形式性は当然のこと

ながら多くの反発・批判を呼び起こした。なかでも、経済人類学者ポラーニが、あえて〈経済〉を実体的なものと結びつけて理解することを主張したばかりでなく、その立場から人類の〈経済〉の歴史を叙述する仕事をおしすすめることによってロビンズに厳しく対立したことは、前節で見てきたとおりである。

ところが、意外なことに、ロビンズのこの徹底した形式性のなかになお実体的なもののかすかな残渣をかぎり、それを振るい落とすことを主張する人がある。自由主義の社会哲学者にして経済学者であるハイエク (Friedrich A. Hayek, 1899-) がその人である。

彼は、1967年に書かれた「政治思想における用語の混乱」¹²⁾において、〈経済(学)〉の定義をめぐる自分の考え方の変化を、次のように告白している。「私は今、経済学という科学を所与の諸目的の実現に向けて希少な手段を処分することの研究であるとする定義が、何ほどか誤解を生むものだと考えている。この定義は、ロビンズ卿によって大変効果的に広められ、私も長く守って来たものなのであるが。」と。

ハイエクの関心は、もともと「市場」にあった。それというのも、市場は「自生的な秩序ないしはコスモス (cosmos)」¹⁴⁾を作り出すからだ、というのである。その立場から、彼もまた、ポラーニと同じく、〈経済〉のタームに二義性を見いだす。「同じ用語が2つの別種の秩序に用いられたために大きな混乱を引き起こし、今なお引続き偉い学者たちさえをも誤らせている例は、おそらく「経済」という言葉であろう、」と。

同じ二義性ではあるが、しかし、ハイエクの考えているその内容はポラーニが述べていたそれとは、形式の上では重なるにしても、本質的な点ではむしろずれていると見た方がよさそうである。「重なる」というのは、2人とも、こ

12) Lionel Robbins, *An essay on the nature and significance of economic science*, Macmillan, 1932, 辻六兵衛訳『経済学の本質と意義』東洋経済新報社, 1957。

13) Friedrich A. Hayek, *The confusion of language in political thought* [1967], in *New studies in philosophy, politics, economics and the history of ideas*, 1978, §6. Catallaxy and economy, p. 90 の脚注。

14) 「コスモス」については後述。

のタームが市場とそれ以外のものとをともに含み得ると見ていたからであるが、「ずれている」というのは、ポラーニがこのタームの中で市場が不当に普遍的な地位を与えられていると考えたのにたいし、ハイエクは反対に、市場概念の中に〈経済〉のもう一つの意味が誤って混入する恐れがあると考えていたからである。つまり、両者はその関心の所在を両極に分けたそれぞれの立場から〈経済〉のタームの二義性を問題にしたのであった。

ハイエクによれば、〈経済〉という用語は、第1に、「一元的な位階構造をもつ諸目的——たとえば、家計、企業、あるいはその他の任意の組織（これには政府もはいる）——に役立つように資源を慎重に準備し組織することにも用いられるし、さらには、こうした種類の経済が多数相互に関係し合っているような構造、すなわち、‘社会経済’、‘国民経済’、‘世界経済’あるいはたんに‘経済’と呼んでいるものにも用いられる」。そして第2に、それは、「市場が作り出す秩序構造」にも用いられる。つまり、後者は、「自生的な秩序ないしはコスモス」であるから、前者の「最初からもっぱら経済と呼ばれている手配（arrangement）とか組織とかとは、多くの点でまったく異なったものである」（p. 90）、というのである。

このように〈経済〉という一個同一のタームが2つの別個の事柄に用いられたために、それら2つの事柄が結びつけて理解される誤りが生じたというのがハイエクの認識である。その誤りを具体的にいえば、「市場があたかも本来の経済（an economy proper）そのものであるかのように振る舞うべく作られねばならず、また市場のパフォーマンスも本来の経済と同じ基準によって判定されることができるし、またそうされねばならない」という信念のことである。「この信念が、さらにおびただしい誤謬を生み出すものになった」とハイエクは考えていた（p. 90）。

この誤った結びつきを切り離すために、ハイエクは、そこからさらに進んで、「自生的に形成される市場秩序を記述するには新しい用語を用いることが必要のように思える。」とした上で、「市場理論」を「キャタラクティクス catal-

lactics」, 「その秩序そのもの」は「キャタラクシー catallaxy」と呼ぶことを提案するのである (p. 90)¹⁵⁾。彼によれば, 「この新造語を導入する主たる目的は, キャタラクシーが特定の位階構造をもった具体的な諸目的に役立つように作られるべきではないし, また出来もしないことと, それゆえに, そのパフォーマンスが特定の諸結果の和という観点から判定されることはできない, ということを強調するにある。」 (p. 91)。

こうした立場からは, ロビンズのあの経済学の定義も, 「キャタラクティクス〔交換学〕の序論的部分——時として‘単純経済 simple economies’と呼ばれて来たものの研究——ならびにアリストテレスの『オイコノミカ Oeconomica』¹⁶⁾がもっぱら対象とした部分にだけ適切のように思える。つまり, 単一家計ないしは企業による処分であって, ときとして経済計算とか選択の純粹論理として記述されているものである。」ということになる。そして, 「ロビンズの現在広く受入れられている定義が私には人を誤らせるものだと思える理由は, キャタラクシー〔市場秩序〕が奉仕する諸目的は, 誰にとっても, 全体としては所与ではないということ, つまり, その過程に参加するどの個人にとっても, またその過程を研究する学者にとっても既知ではない, ということである。」と, その不満の理由を述べるのである (p. 90 の脚注)。ここでは, 問題は, すでに, 経済学の定義が実体的か形式的かという点を離れてしまっている。

ハイエクの思想に多少とも触れたことのある人には, これらの叙述はすぐに理解できるだろうけれども, そうでない人には, いささか分りにくいかも知れないので, もう少し説明を補っておこう。

ハイエクによれば, 〈経済〉という語からふつうに連想されるものは, 「1

15) 「キャタラクティクス catallactics」は, もともとホイートリ (Richard Whately, 1787-1863) の命名にかかるもので, 交換を意味するギリシャ語の *καταλλάσσειν* からとった語。経済学を交換の科学として純化しようとする提唱である (Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, 1908, 2te Aufl., 1970, S. 50, 訳113ページ, および, *History of economic analysis*, 1954 (6th printing, 1967), p. 536, 訳1127ページ)。

16) 正確には, 「偽アリストテレスの著」と言うべきであろう。アリストテレスの流れをくむ「逍遙学派 (ペリパトス) のものとされる。M. I. Finley, *Economy and society in ancient Greece*, ed. by B. D. Shaw and R. P. Saller, 1981 (1st ed. in 1953), p. 98。

個の経済」である。これが「本来の経済 an economy proper」であり、それは「所与の手段を一元的な計画にしたがって、競合する諸目的の間にその相対的重要さに応じて配分する諸行為の複合から成り立って」(p. 107) いる。それはまた、「ある単一の主体が既知の手段の利用を慎重に手配する」という意味で「技術的な組織である」(p. 108)。これにたいし、やはり〈経済〉の中にふくめて理解されている「市場というコスモスは、そうした単一の尺度をもった諸目的によって支配されてもいないし、できもしない。それは、そのばらばらな成員全体のばらばらな通約できない多様な諸目的に奉仕するものである」¹⁷⁾。

〈経済〉という語がこの双方の意味をふくむために、市場秩序も「本来の経済とおなじ基準で秩序づけられるべきだし、判定もされるべきだとする」誤った信念が生じることになった。そこで、「経済という語のあいまいさによって生みだされた」この混乱を避けるために、「経済という語の使用を、厳密に本来の意味に、すなわち単一の尺度をもった諸目的に奉仕する慎重に調整された諸行為の複合に限定することにし¹⁸⁾、市場秩序を構成するところの相互に関連をもつ多数の経済のシステムを記述するにはもう一つ別の言葉を採用することが必要」だとするのである。

ここでハイエクが主張しているのは、要するに、ロビンズの経済学の定義は、位階構造をもった目的を前提することになり、それは単一にして全体である存在、つまり1個の主体の存在を想定することにつながるものだ、というにある。ハイエクにとっては、市場において全体が結果として成立することはいいにし

17) Hayek, *The market order or catallaxy*, in *Law, legislation and liberty*, vol. 2, *The mirage of social justice*, London, 1976, Chap. 10. なお、ハイエクは、そこで「経済」のもう少しくわしい分類を与えている。「厳密に言えば、世帯、農家、企業はそれぞれ諸経済と呼ばれることができる。」また、「ふつうに社会経済ないしは国民経済と呼ばれているものは、この意味では単一の経済ではなくたくさんの相互にからみあった諸経済のネットワークである。」

18) 「諸行為の複合」とは、具体的には、世帯、農家、企業のそれを指す。注17に引用した箇所では、「1個の経済は、所与の手段を一元的な計画にしたがって、競合する諸目的の間にその相対的重要さに応じて配分する諸行為の複合から成り立っている。」と述べられている。

でも、市場にはじめから全体があって、それが何らかの目的を持つと考えることは我慢のできないことであった。このことはまた、たとえ経済学者であっても、外から市場を観察して市場のパフォーマンスの成否を判定することはできない、という主張をふくんでいる。そもそも市場における自由な「競争」という事実的行為こそが、「実際に生産されるものすべてができるだけ最小の費用で生産されるという状況」を目指す「発見手続き」なのだ (p. 91), というのがハイエクの確信であった。

ロビンズの定義において、内容を捨象されたその目的がいかに抽象的なものとして語られているにせよ、ともかく市場秩序を重視するハイエクにとっては、選択行為に際しての諸目的は位階構造をとらざるを得ず、この位階構造をもった目的、その背後にある単一の経済主体、さらには家計、企業、政府など実体的なものとの間にわずかに残っているそのつながりが、ロビンズの定義の棄却に向かわせたのである。

ロビンズは最近の論文においてハイエクのこの提案を取り上げ、それに否定的な見解を表明した。「思うに、このアプローチはひじょうに深い洞察に導いてくれるものである。しかし、この考え方が、現実にてであろうと暗黙裡にてであろうと、交換に導く条件を十分明確にしてくれるものとは思わない。」と。ここでロビンズが「交換に導く条件」と言っているのは、言うまでもなく「希少性」のことである¹⁹⁾。けっきょく、ロビンズによるハイエクにたいする反批判は、キャタラクティクスという概念のもつ極端な抽象性に向けられていると見ていいだろう。ただし、ここでロビンズはハイエクの批判にまともに答えてこのように言ったのではない。彼は、ハイエクのキャタラクティクス提案をホートリ、シュンペーターの同様の提案とまったく同じものとして扱い、これを批判しただけのことである。少なくとも、ハイエクとシュンペーターでは、同じように「交換」を重視しながらも、根本的ともいえる差異がある。ハイエ

19) Robbins, Economics and political economy, *American economic review*, 71 (2), May 1981. のち、*An essay on significance* の第3版 (1984) に収録。引用は同書による。

クが交換を市場と結びつけてのみ理解するのにたいし、シュンペーターは孤立経済主体ロビンソン・クルーソーの選択行為のうちにさえも交換現象を見出していたからである²⁰⁾。

いままで見て来た彼自身の言葉とは反対になるけれども、おそらくハイエクは、本当のところ、「市場」のみが〈経済〉だと言いたかったはずである。少なくとも経済学の主対象、経済学者の中心的研究主題だと言いたかったはずである。そして、実際にも、彼は、「現在経済学と呼ばれているものは、アリストテレスが *chrematistike* すなわち富の科学と書いたように、*catallactics* と書いた方がいい」(p. 90, 脚注21) (傍点——引用者)、と言っている。つまり、言葉の矛盾をいとわなければ、ハイエクにとっては、“経済学の対象は、〈経済〉ではなく、キャタラクシー〔市場秩序〕である”，とすることができよう。

ハイエクのこの主張は、しかし、単に〈経済〉の語義のあいまいさからくる混乱を避けるためという消極的な立場からなされているのでないことは、すでに明らかであろう。〈経済〉の概念の本質的な部分、あるいは原理的なものは、キャタラクシー〔市場秩序〕に体现されているという考えから、彼は、それをクリスタルな形で取り出して、そのことを鮮明に示そうとしたのである。だから、彼の立場を、本章の問題設定の文脈に合わせてさらに約言すれば、“経済学の主題は、市場現象であるべきだ”というにつきる。

いまや、存在としての〈経済〉は2分され、その一方のみに対する関心が示されている。そして、この立場は、単に経験的なものではなく、同時に理念的なものに支えられている。つまり、彼の経済観ならびに経済学観の背後には、彼に独自の社会哲学全体が控えているのである。

V む す び

以上に見て来たように、ポラーニもハイエクも〈経済〉という語の二義性を指摘し、その二義を純粋に分離しようと試みた。ただし、その純粋化の方向は、

20) Schumpeter, *Das Wesen*, 前掲箇所。ただし「孤立した経済者」という表現が用いられている。

「市場」を中心に両者でまったく逆の方向に向かっていった。

一方のポラーニが〈経済〉の在り場所を人間生活の営み *livelihood* 一般に求め、それが制度化された過程を〈経済〉としてつかみ、その見地から、市場制度を互酬、再分配と並ぶ経済制度のひとつにすぎないとしたのにたいし、他方のハイエクは、逆に市場こそ普遍的なものであり、各個別経済は経済学の研究にとっては従たるべきものとした。

ところで、このように対立する両者ではあるが、〈経済〉という言葉で人びとが一般に何を思い浮かべるかについての事実認識の点では、両者のあいだに実質的にそれほど大きな隔たりはないように見える。つまり、一般の人びとならびに大多数の経済学者にとって「存在している経済」の姿をポラーニもハイエクも、とりあえずは共有していたように思えるのである。

どちらも、人びとが、単独であるいは集団で、相互の関係を通じながら、自己の欲求を充足させる手段を継続的に入手しているという状況をイメージしている。ただ、ポラーニから見れば、人びとが思い浮かべている〈経済〉の画面には、「欲求を充足させる物質的手段の継続的供給をもたらす」過程が画かれていたが、同時に、その過程は「人とその環境とのあいだの制度化された相互作用」として行われており (T. p. 248, 訳265)、そのための場所として、希少性およびそこから来る合理的行為と結びついた市場がとりわけ大きな役割を占めていた。他方、そうしたものとしてハイエクが見た〈経済〉の絵には、無数の個別経済あるいは諸経済 (世帯、農家、企業)、諸経済のネットワーク (社会経済、国民経済)、そして市場までもが、いずれも「所与の手段を一元的な計画にしたがって、競合する諸目的の間にその相対的重要さに応じて配分する諸行為の複合から成り立っている」²¹⁾ものとして、同じ姿で画き込まれていたのであった。

同じ画面を見ながら、両者の目のつけどころはたがいに異なっており、しか

21) The market order or catallaxy, in *Law, legislation and liberty*, vol. 2, *The mirage of social justice*, London, 1976, Chap. 10, p. 107-8.

も2人ともその画面に満足してはいなかった。そこで、ポラーニは、中世から古代、あるいは未開を画いた画面を継ぎ足すことにした。継ぎ足された画面には合理性の色は塗られていない。〈互酬〉の画面と〈再分配〉の画面がそれだ。もとの〈市場〉を画いた画面に塗られた合理性の色もいくらか薄められている。ハイエクは、新しい画面を継ぎ足すよりもいまの画面を分割することを選んだ。しかし、その前に、彼は、市場の姿をそれ以外のものとは異なった姿に書き直しておき、自分のためには、その画面だけを残そうとした。もっとも、これらの新しい画面も、決して彼らの想像の産物ではなかった。ポラーニにとっては、それはこれまで隠れて見えなかった画面を探し出して来て、それらが一連のものであることを確認しただけのことであつたし、ハイエクのぼあいも、これまではぼやけてその違いがはっきりしていなかったものをはっきりさせただけのことであつた。

2人とも〈経済〉の一般的な意味から出発しながら、いずれもその二義性を指摘したところまでは同じである。あるいは、その二義の内容のつかみ方にも重なるところがある、と言ってもいいかもしれない。だが、さらに進んでそれを明確な概念に仕上げる段階にまでいたると、両者がまったく反対の方向を目指していることがはっきりする。この段階では、われわれはすでに、両者それぞれに見えている「存在としての経済」がおたがいに異なっているばかりでなく、ともに一般の人びとならびに大多数の経済学者とも異なっているのを見ることができる。では、〈経済〉にこのように異なった規定を与えるにいたった両者の立場の根底にある違いは何であろうか。

ハイエクの最大の関心は、「個人の自由」にある。「個人の自由」こそは、彼の価値判断の根本的な立脚点である。その立場から、彼は、社会の秩序を「人為的秩序」と「自生的秩序」の2種に区別する。前者は「作られた秩序 made order」で、外から目的が与えられることを特徴としており、後者は「成長する秩序 grown order」で、それ自体としては目的をもたないことがその特徴である。彼は前者をタクシス (taxis)、後者をコスモス (cosmos) と呼ぶ。

いずれも、同義のギリシャ語に由来する²²⁾。

言うまでもなく、個人の自由は後者においてのみ可能である。構成された秩序(タクシス)は、特定の目的と結びついているので、そこでは個人が自分の目的を追求することが制約されるのにたいし、自生的秩序(コスモス)では各個人は一定の行動規則に従いながら自分の目的を自由に追求できるからである。したがって、自生的な秩序こそが望ましいものである。そして社会制度の中で、このコスモスのもっとも中心的なものが「市場」であってみれば、ハイエクの主要な関心の焦点がコスモスとしての市場(キャタラクシー)の上に結ばれたことは当然であった、と言えよう。

このような社会哲学的次元から出発したハイエクとは対照的に、ポラーニの立場は、はじめから社会人類学者としてのそれであったように見える。時代を隔て文化を異にする人びとを共通の土俵の上で比較するというのが、その学問の本来の方法であってみれば、そこから、およそ人間が生計を立てるために物質的なものを獲得しなければならない、しかも一定の社会関係を媒介として行わなければならない、という普遍的な事実(経済)を引きつけて理解しようという態度が生まれたことは、これまた当然のことであった。

しかし、ポラーニ自身がある手紙の中で「ちょうど50歳のとき、イギリスの状況が私を経済史の研究へと導きました。」と書いているのを見ると、ポラーニを最初からの職業的人類学者と見るのは誤りであろう。しかも、未亡人によると、彼は1930年代なかばにイングランドに渡り、そこでの経験が「階級社会の古典的原種に嫌悪をいだくように」させた、という。とくに注目すべきは、続けて未亡人によれば、「彼の憎悪は、市場社会とその影響——人間から人間らしさを奪いとるもの——にたいして向けられたものであった」(L. p. xvi, 訳28)という。して見れば、ポラーニのばあいは「市場」にたいする強い負の関心がさきにあって、それが次に彼をして異なった時代、異なった民族に属し、

22) Hayek, *Cosmos and taxis*, in *Law, legislation and liberty*, vol. 1, *Rules and order*, London, 1973, Chap. 2.

異なった文化をもつ人間を対等に扱う人類学に向かわせたと理解することが妥当であろう。市場原理の普遍化にたいするポラーニの徹底した拒否の姿勢は、おそらくここから説明できるはずである²³⁾。ここでもまた、生活体験の中から形成されたものではあれ、一つの強烈な関心が一人の学者の〈経済〉を見る目を規定していたことを知ることができる。

両者はそれぞれ、「市場」を軸にしながらもまさに正反対の方向に向かう各自の関心にもとづいて、社会のさまざまな現象の中から〈経済〉という現象を切りとって来たのである²⁴⁾。切りとられてできた「在るもの」としての〈経済〉の像は、両者でまったく異なったものと言っていいものである。しかも、ハイエクのばあいには、「在るもの」としての〈経済〉の像の上に「在るべきもの」としてのそれがダブって見えさえもする。

こうして、〈経済〉とは何かという問題にたいする答えは、本稿でもふたたび与えられることはできなかった。しかし、前稿の考察に本稿の考察を加えることによって、問題そのものの性質についての理解は、格段に進んだはずである。第1に、〈経済〉にどのような定義づけを与えるべきかという次元にとどまっていれば、この問に答えることはおよそ不可能であることが分かった。第2に、〈経済〉の語によって一般の人びとがどのような表象をいだくかを経験的に確定する方法も無駄であることが示された。だがポジティヴには、第3に、

23) 問題を「資本制」の局面で押さえないで「市場制度」で押さえたところに、ポラーニのひとつの特徴がある。こうしたとらえ方は、「疎外」を「資本制」とではなく「商品生産」一般と関係づけて論じたバッケンハイムにもその例があり、珍しいものではないが、ともかく、ポラーニあるいは広く経済人類学において「資本制」と「市場制度」の関係がどうであるかは、留意されていい問題であるように思える。

24) ポラーニとハイエクが対立するもうひとつの舞台は、じつは、すでに1920年代のいわゆる「社会主義経済計算」論争に見られた。本稿でしつらえた舞台と20年代のそれとをつなぐ論理を探ることは、それなりに興味ある問題だが、いまの私には、その準備はない。これに関する文献は、次のものである。Karl Polányi, Sozialistische Rechnungslegung, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 49 (2), 1921; Der funktionelle Theorie der Gesellschaft und das Problem der sozialistischen Rechnungslegung, *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 52 (1), 1924, および, F. A. Hayek (edited, with an introduction and a concluding essay), *Collectivist economic planning*, 1935.

認識すべき対象の確定そのものが、認識主体のいづく関心に深く規定されることが分かった。次稿では、この角度から、問題への再アプローチを試みることにしたい²⁵⁾。

(1986. 5. 5)

25) 高橋 正立「経済とは何か—認識関心からのアプローチ」『人文』京都大学教養部、第33集、1987-3、予定。